



発見

フィラデルフィア

ここでしか得られない素晴らしい体験

PHLCVB
Philadelphia Convention
& Visitors Bureau

USA
DiscoverAmerica.com

NATIONAL
GEOGRAPHIC
TRAVELER

フィラデルフィアの 基本情報



交通情報

飛行機、電車、バスまたは車でも、フィラデルフィアは世界中どこからでも簡単に訪れることができる便利な都市です。Philadelphia International Airport（フィラデルフィア国際空港：PHL）は市街地からたったの 8 マイル（13km）という便利な立地です。また、Newark Liberty International Airport（ニューアーク・リバティー国際空港：EWR）や John F. Kennedy International Airport（ジョン・F・ケネディ国際空港：JFK）から電車やシャトルバス、レンタカーで訪れることも可能です。この 2 つの空港からの車での移動時間は約 2 時間程度です。

フィラデルフィア国際空港からセンターシティ（中央部）までの移動時間は、フィラデルフィアの公共交通システム SEPTA では 20 分、タクシーでは 25 分です。SEPTA の空港線は 30 分間隔で運行しています。片道運賃は約 8 ドルです。septa.org。空港から市内までのタクシー料金は平均 28.50 ドル（チップは別途）です。

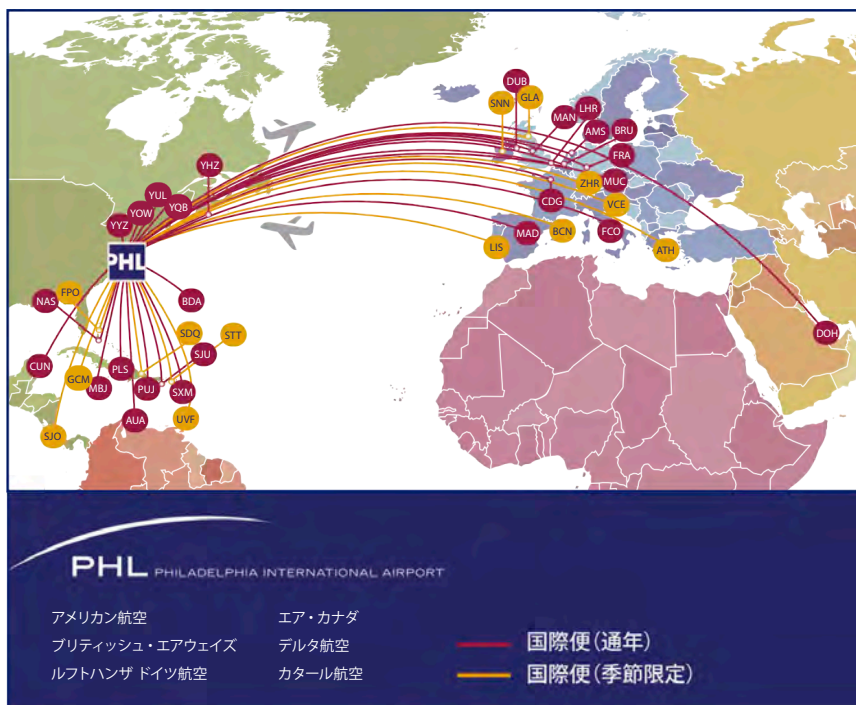
その他の地上交通手段についての情報は、空港アクセス情報ホットライン（+1-215-937-6958）までお問い合わせください。phl.org



周辺案内

東海岸の中央部に位置する理想的な立地だけがこの街の魅力ではありません。ここは、世界の中で有数の「歩きやすい街」でもあります。その上、センターシティの中心部には幅広い価格帯のホテルやレストランが数多く集まっています。一流の公共交通機関も整備されています。行きたいところへ連れて行ってくれるタクシーも十分あります。

フィラデルフィア建設者ウィリアム・ペンによる簡潔なグリッド式の街路図のおかげで、中心市街はわかりやすい構造となっています。センターシティと呼ばれる 25 ブロックの地区は、スクールキル川とデラウェア川によって東西を挟まれています。街の東西を走る通り（マーケット通りの南側）は木の名前が付けられており、南北の通りには数字が順に付けられていることを覚えておってください。（19 ページの地図をご覧ください。）



VISITOR CENTERS

ビジター・センター（案内所）

インディペンデンス・ビジター・センターでは、フィラデルフィア市内や周辺地域に関する情報のご案内はもちろん、おすすめスポットのご紹介や地図の配布なども行っております。12 国語対応のコンシェルジュサービスが、あなたのご希望に合わせた旅行プランをご提案いたします。

phlvisitorcenter.com

Independence Visitor Center
(インディペンデンス・ビジター・センター)

6th & Market Street の交差点

City Hall Visitor Center
(市庁舎ビジター・センター)

Broad & Market Street の交差点, Room 121, City Hall

Fairmount Park Welcome Center, LOVE Park
(フェアマウント公園ウェルカムセンター ラヴ・パーク)

16th Street & John F. Kennedy Boulevard の交差点

Sister Cities Park Café and Visitor Center
(シスター・シティーズ・パーク・カフェとビジター・センター)

18th Street & Benjamin Franklin Parkway の交差点

トップクラスのホテルが勢揃いするフィラデルフィアは、旅行の拠点としてもとても便利な場所に位置しています。アーミッシュや「ペンシルベニア・ダッチ」の町、ランカスターや ニュージャージー州のアトランティックシティへの日帰り旅行にもうってつけです。



フィラデルフィアへのご旅行プランに必要な基本情報は、discoverPHL.com/international ですべて入手できます。観光や宿泊に関する情報はこちらでご確認ください。

ようこそ フィラデルフィアへ

旅行者のための基本情報



フィラデルフィアは 豊かな歴史とハイテク技術、近代的な思想が混在する街です。アメリカの民主主義発祥の地として知られていますが、フィラデルフィアの多様なコミュニティ、活気がある博物館や刺激的なスポーツや文化施設を体感することで、この街に息づく自由と革新の伝統をさらに深く学んでください。

「兄弟愛（そして姉妹愛）の街」の異名を持つフィラデルフィアで、楽しい時間をお過ごしください。そして、またフィラデルフィアを楽しむために戻ってきてくださることを心から願っています。

フィラデルフィア観光局は、米国の観光マーケティング会社 Brand USA および『ナショナル ジオグラフィック トラベラー』誌との協力のもとで、思い出に残る素晴らしい体験が味わえる街、フィラデルフィアの観光 PR キャンペーンを展開しています。フィラデルフィアはフレンドリーで散策しやすく、美しい街並、世界有数の文化施設やグルメ、エンターテインメント、そして数々の公園が揃っています。常に変化し続け、いつも心躍る街。フィラデルフィアの人気の秘密をご自分で発見してください。

フィラデルフィアの基本情報	2
48 時間滞在プラン	4
お食事&ナイトライフ	6
個性あふれる地域社会	7
免税ショッピング	8
イベントカレンダー	9
フィラデルフィア オリジナルズ	10
センターシティ地図	19

*『ナショナル ジオグラフィック トラベラー』誌より再録

48

時間でフィラデルフィアを堪能

歴史的な建造物や注目の文化スポットが一体となり、アートや歴史、ナイトライフ、グルメ、そして音楽が鮮やかに織り合わさる都市へようこそ。フィラデルフィアを2日間で堪能する滞在プランをご提案します。



まず1日はベンジャミン・フランクリン・パークウェイに沿って、のんびりウォーキングやジョギングをして始めましょう。ゴールは **Philadelphia Museum of Art (フィラデルフィア美術館)** の正面階段。この階段は、映画『ロッキー』の有名な場面の舞台となった場所です。フィラデルフィア美術館には世界的に有名な作品が数々収蔵されています。美術展示をじっくり見ていたら、午前の時間はあっという間に過ぎてしまうでしょう。 philamuseum.org



フィラデルフィアの観光スポットをより熟知したいという方には、**double-decker bus tour (2階建てバスのツアー)** がおすすめです。乗り降り自由のバスで、気になるスポットをじっくり訪れることができます。または、異なる視点から街を観察するために、散策やセグウェイのツアーに申し込んでみるのはいかがでしょうか。 discoverPHL.com/tours



長い歴史を誇る(そしていつでも活気にあふれている) **Reading Terminal Market (レディング・ターミナル・マーケット)** にて、職人の手作りのチーズや郷土料理、農場直送の新鮮な食材をお昼に味わうのはいかがでしょうか。このマーケットには100軒以上がお店しています。 readingterminalmarket.org



フィラデルフィアは米国最大のパブリックアートプログラムを実施しており、事業の開始以来、3,600点以上のアート作品が制作されてきました。フィラデルフィア市の「壁画の街」を歩いて、あるいはバスに乗って、または **City of Philadelphia's Mural Arts Program (シティ・オブ・フィラデルフィア・ミューラル・アーツ・プログラム)** のガイドなしツアーを通して体験しましょう。 muralarts.org



次は **Independence National Historical Park (インディペンデンス国立歴史公園)** に向かいましょう。ここは、米国で最も歴史ある広場です。ユネスコの世界遺産に指定されている独立記念館もここにあり。他にも「自由の鐘」など、数多くの史跡があります。周辺スポットの情報がすべて揃っているため、まずインディペンデンス・ビジター・センターを訪れることをおすすめします。 nps.gov/inde

気晴らしにお買い物をしたい方は、**Rittenhouse Row (リッテンハウス・ロウ)** へ行きましょう。リッテンハウス広場から先にあるウォルナット通りの沿道は、**免税**で洋服や靴のショッピングを楽しむことができます。ほっと一息したいあなたには、通りに面したカフェでのんびりとお食事というのもいいでしょう。 rittenhouserow.org



お食事&ナイトライフ

本格的なエスニック料理から人気の郷土料理、モダンな創作料理まで、フィラデルフィアの食のバラエティはとめどなく豊かです。フィラデルフィアには、高級レストランから古風なビストロ、さらには250店以上あるオープンカフェまで、さまざまな選択肢が勢揃いしています。一流のオーナーシェフが仕切る洗練されたレストランもあれば、古い建物を利用した小ぢんまりとしたカフェも点在し、その上川辺やスカイラインの素晴らしい眺めが楽しめるお店もあります。

メニューも、コンテンポラリーなものからクラシックなものまで、忘れられないお食事をお楽しみください。多くのレストランではさまざまな種類のビールを提供しています。フィラデルフィアで醸造された地ビールも是非お試しください。ちょっと変わった体験をご希望の方は、お食事時にラヴ・パークやペンシルベニア大学、ドレクセル大学の周辺にやってくるトラック屋台がおすすめです。カジュアルな軽食や一風変わったエスニック料理に挑戦してみたいはいかがですか？



地元で人気のグルメ

多様な文化が息づく大都市、フィラデルフィアでは世界のあらゆる地域の料理を食することが可能です。でも、もし本格的な味をお求めなら、地元のフィラデルフィアの人々に人気のお店に行くのが賢明です。

フィラデルフィアならではの味といえば、**チーズステーキ**と呼ばれる市の公式サンドイッチ。とけたチーズにやわらかいビーフチョップまたはスライスが絶妙な組み合わせを醸し出すサンドイッチです。ほとんどのお店では、チーズ・ウィズ、アメリカン・チーズ、プロヴォローネ・チーズのうちからお好みのものを選ぶことができます。あるいは、生の玉ねぎまたはフライした玉ねぎをトッピングすることも可能です。

夏のフィラデルフィアの風物詩は**ウォーター・アイス**（別名イタリアン・アイス）です。氷とフルーツジュース、それに新鮮なフルーツをミックスした、冷たくて口当たりなめらかなフロゼン・デザートです。街中に出店している屋台やお店で売られています。チェリーやレモンなどのクラシックなものから、マンゴーやパッションフルーツなどのエキゾチック



な風味まであります。

ソフトプレッツェルはフィラデルフィアの地元民にとっては究極のソウルフードです。手でひねって毎日焼き立ての塩味のスナックパンは屋台や地元のお店、工場直送でも販売されています。スパイシーなマスタードをつけて食べるのも美味です。

フィラデルフィアのナイトライフ

夜通し踊り明かしたい人、もしくはライブのショーを満喫したいという人、誰もが楽しめるものがフィラデルフィアにあります。

小さなライブハウスを会場とした地元のインディー・ロック・バンドのライブから、2万人以上収容可能なウェルズ・ファーゴ・センターでの大規模なコンサートまで、フィラデルフィアのエンターテインメントは大満足間違いなしです。キンメル舞台芸術センターでは世界的に有名な**フィラデルフィア管弦楽団**、歴史あるアカデミー・オブ・ミュージックではペンシルベニア・バレエの公演が観られます。両所とも、フィラデルフィアが誇る一流の文化施設が集まる地域、アベニュー・オブ・ジ・アーツに位置しています。

もっとアクティブな時間を過ごしたいという方は、市内にあるボーリング場やダンスクラブにお出かけください。あるいはコメディショーで大笑いするのも良いかもしれません。運試しにはシュガー・ハウス・カジノへ行ってみるべきです。フィラデルフィア近郊には他にもいくつかのカジノがあります。何を選んでも、賑やかで活気にあふれるフィラデルフィアの夜は長いです。

テーマ別やエリア別のレストラン
検索は discoverPHL.com/dining にて行ってください。



個性あふれる 地域社会

フィラデルフィアの地区ごとに
ユニークな特徴があり、
それぞれあなたを待っています。

Historic District & Waterfront (歴史地区とウォーターフロント)

新しさと古さの絶妙なバランスが見られるこのエリアは、18世紀へとタイムスリップさせてくれます。コンテンポラリーのアートギャラリーや、ブティック、ビストロなどを冒険してみたいかでしょうか。月明かりの下で馬車に乗ってみたり、幽霊ツアーに参加するのも、忘れられない珍しい思い出になるでしょう。夏の間には映画やコンサートが無料で楽しめるイベントや多文化フェスティバルがベンス・ランディングにて開催されます。毎月の第1金曜日には各ギャラリーが夜遅くまで開放されていて、特別なイベントも開催されます。アート愛好者たちと一緒にギャラリー巡りに参加してみたいかでしょうか。フロント通りと2番通りの間に位置するアメリカ最古の住宅街、エルフレス・アレイも必見です。



Rittenhouse Square (リッテンハウス広場)

上品な雰囲気漂うこのエリアには、有名な高級ブランドのショップやオープンカフェ、一流レストラン、そしてナイトライフの名所などが集まっています。エリアの中心となるのがリッテンハウス広場という、優美な公園。園内には、パリの公園を模してつくられた広場と噴水があります。ラテを飲みながらのんびりと散歩したり、行き交う人々を眺めるのも楽しいでしょう。

Washington Square (ワシントン広場)

緑あふれるオープンスペースでのんびりとした時間を過ごすなら、ワシントン広場が適所です。周辺は人気の住宅街で、変わったショップなどが数多く立ち並んでいます。アンティーク通りやジュエラーズ通りもこのエリアにあります。メイシーズでは洋服や靴の免税品の買い物をお楽しみいただけます。カフェやショップ、本屋が集まるエリアでもあり、活気あふれるLGBTコミュニティがある地域でもあります。



Parkway Museum District (パークウェイ・ミュージアム地区)

パリのシャンゼリゼを模してつくられたベンジャミン・フランクリン・パークウェイには、世界的なミュージアムやパブリックアートが一堂に集まっています。フィラデルフィア美術館からドレクセル大学自然科学アカデミー、ロダン美術館、フランクリン協会科学博物館、それにバーンズ・コレクションまで、文化追求者にはどれも外せない場所ばかりです。フェアマウント公園は世界最大の都市公園のひとつに数えられています。川沿いの道はウォーキングやジョギング、サイクリングにぴったりです。



Convention Center District (コンベンションセンター地区)

ペンシルベニア・コンベンションセンターの向かい側にはペンシルベニア美術アカデミーとレンフェスト・プラザがあります。プラザは、すぐ近くのレディング・ターミナル・マーケットで買ったランチを食べるのに最適な屋外広場です。このエリアには米国で3番目に大きいチャイナタウンもあります。多種多様なショップや、餃子や麺、フォーなどさまざまなアジア料理が楽しめるレストランが軒を連ねています。

University City (大学街)

もとはフィラデルフィアの郊外だったこのエリアには、現在ペンシルベニア大学やドレクセル大学など6つの大学が集まっていて、地域全体では合計で101もの大学があります。今では、若者たちのエネルギーがあふれ、多様な文化が混じり合った都会的なコミュニティが形成されています。レストランやアートギャラリー、博物館、劇場も幅広くあります。ペンシルベニア大学考古学人類学博物館やフィラデルフィア動物園、現代美術館もこのエリアにあります。



South Philadelphia (サウス・フィラデルフィア)

サウス・フィラデルフィアは、何世紀にもわたって世界中からの移民を受け入れてきたエリアです。魅力的な長屋の家並や家族経営のレストランなどがその歴史を物語っています。イタリア系やアイルランド系、アジア系、そしてメキシコ系の人々が多く暮らすこのエリアのおかげで、今日でも多様な文化が花開いています。パスアंक・アベニューと9番通りの角には、チーズステーキ・サンドイッチの有名店があります。サウス・フィラデルフィアで最も人気のエリア、パスアंक広場ではオープンテラスでのお食事がおすすめです。

Manayunk (マネイアंक)

「マネイアंक」は、インディアンのレナペ族の言葉で「飲みに行くところ」から由来しています。かつては工場街だったこの川沿いのエリアは、現在ではショッピングとナイトライフが楽しめるお洒落なスポットに生まれ変わっています。SEPTAのリージョナル・レールをご利用の場合は、マネイアंक/ノリスタウン線でセンターシティ（ジェファーソン駅、サバーバン駅、30番通り駅のいずれか）からマネイアंक駅まで直通でアクセス可能です。このエリアは屋外でお食事が楽しめる醸造所やバー、エスニックなレストランなどが数多くあり、その席数は全部で900を超えます。

免税ショッピング

センターシティだけで小売店の数は 2,000 軒以上もあります。買い物好きにとって、フィラデルフィアはまさに天国のような場所です。ブランド品や高級品をお値打ち価格で手に入れたいと思っている人、素敵なヴィンテージのアイテムをお探しの人も、きっと大満足の買い物ができるでしょう。さらに、衣類や靴はタックスフリーで購入できることもあり、買い物上手の方にとってはまさに大チャンスです。



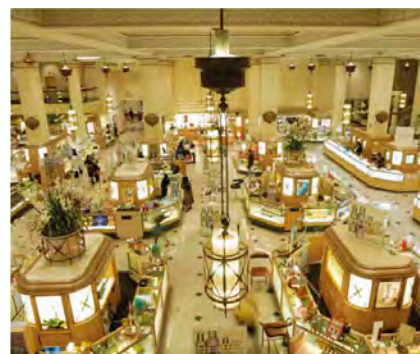
免税で

洋服や靴の
ショッピングを

市内には、米国で最も長い歴史を持つダイヤモンド取引地区として知られる Jewelers' Row (ジュエラーズ通り) や、アメリカらしい逸品が手に入る Antique Row (アンティーク通り) などの専門店街もあります。また、ここでしか手に入らないアイテムや有名ブランドショップでのお買い物なら、ウォルナット通りにある Rittenhouse Row (リッテンハウス・ロウ) を訪れましょう。Rittenhouse Square (リッテンハウス広場) は、ショッピングで歩き回って疲れた足を休ませるには最適な場所です。フィラデルフィア生まれのブランド、アンソロポロジーやアーバン・アウトフィッターズの店舗も近くにあります。お買い得品がお目当ての方には、センチュリー 21 やノードストローム・ラックもおすすすめです。

Macy's Center City (メイシーズセンターシティ店) は豪華な Wanamaker Building (ワナメイカー・ビルディング) の中に入っています。この建物は、フィラデルフィアで最初にオープンしたモダンなデパートです。メイシーズのビジター・センターでパスポートを提示すれば割引サービスが受けられます。

郊外まで車を少し走らせれば、400 以上の店舗が入っている King of Prussia Mall (キンブ・オブ・プルシア・モール) をはじめ、Philadelphia Premium Outlets (フィラデルフィア・プレミアム・アウトレット) や Philadelphia Mills (フィラデルフィア・ミルズ) などの有名ブランドのアイテムが非常にお手頃な価格で手に入るスポットがいくつかあります。



詳しい店舗情報は discoverPHL.com/shopping でご確認ください。

アウトドアとスポーツ

フィラデルフィアは全米有数のスポーツ都市で、一年中いつでもスポーツを楽しむことができます。

プロスポーツ

アメリカンフットボール: Philadelphia Eagles (フィラデルフィア・イーグルス) は 67,594 人収容可能な巨大スタジアム、Lincoln Financial Field (リンカーン・フィナンシャル・フィールド) を本拠地としています。(9 月～1 月)

野球: 米国の国民的スポーツといえば野球です。Philadelphia Phillies (フィラデルフィア・フィリーズ) のホームゲームは Citizens Bank Park (シチズンズ・バンク・パーク) で行われます。(4 月～9 月)

サッカー: メジャーリーグ・サッカーの加盟クラブ、Philadelphia Union (フィラデルフィア・ユニオン) の本拠地は、センターシティから車や電車で 30 分の郊外の町チェスターにある PPL Park (PPL パーク) スタジアムです。(3 月～10 月)

バスケットボール: 「シックス」の愛称で親しまれている Philadelphia 76ers (フィラデルフィア・セブティシックス) の試合を Wells Fargo Center (ウェルズ・ファargo・センター) で観戦しましょう。(10 月～4 月)

アイスホッケー: ナショナル・ホッケー・リーグ (NHL) 所属の Philadelphia Flyers (フィラデルフィア・フライヤーズ) の試合も Wells Fargo Center (ウェルズ・ファargo・センター) が会場となります。(10 月～4 月)

スポーツイベント

フィラデルフィアは、一年を通じてさまざまなスポーツイベントが目白押しです。スクールキル川で行われるレガッタやドラゴンボートの競争から、フィラデルフィア・マラソンに代表される市街地コースのランニング大会まで、バラエティ豊富です。また、米国内で開催される自転車レースとしては最も権威のある国際大会「フィラデルフィア・インターナショナル・チャンピオンシップ」も市で行われています。スポーツイベントのカレンダーは PHLsports.com でご確認ください。

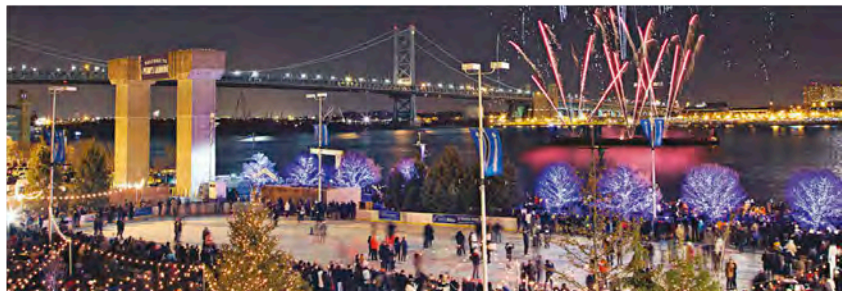
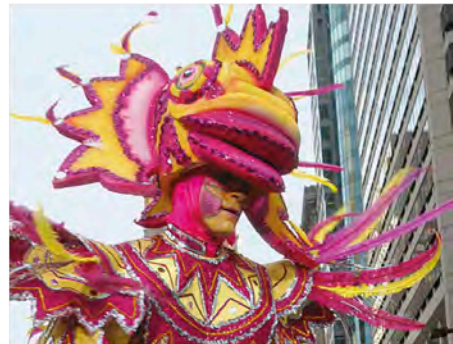
アウトドア

ランニングコースや公園、ハイキングコース、公共の運動場など、体を動かしたい人のための施設も充実しています。Fairmount Park (フェアマウント公園) のコースは全長 215 マイル (346 キロメートル) です。このうち、Schuylkill River Trail (スクールキル・リバー・トレイル) の全長 11.5 マイル (18.5 キロメートル) は舗装路です。Boathouse Row (ボートハウス・ロウ) では自転車やインラインスケートをレンタルすることができます。また、公園内の見どころをガイドが案内する自転車ツアーやセグウェイツアーもあります。fairmountpark.org



イベントカレンダー

一年中いつでも、
フィラデルフィアでは
誰もが楽しめるイベントが
開催されています。



1月

New Year's Day Mummers Parade (新年のママーズ・パレード)

1月1日

記録によると、フィラデルフィアで新年を祝うこのパレードの歴史はアメリカ独立戦争以前にまで遡ります。「ママーズ」というのは無言劇の役者のことで、1900年から地元クラブの会員たちがそれぞれ前の年の出来事の中でも最も印象に残った出来事をひとつ選び、弦楽団の伴奏付きでコミカルな寸劇を演じながら賑やかにパレードするという形式で行われてきました。mummers.com

2月

Philadelphia Auto Show (フィラデルフィア・オートショー)

2月上旬

木と鉄と革でできた65万平方フィート(約6万平方メートル)の巨大な会場で行われるモーターショーです。米国内で開催されるモーターショーの中でもトップクラスの評価を受けているフィラデルフィア・オートショー。さまざまなメーカーが出展し、700台以上の自動車が展示されます。phillyautoshow.com

3月

Philadelphia International Flower Show (フィラデルフィア国際フラワーショー)

3月上旬

10エーカー(約4万700平方メートル)の広大な屋内展示場を舞台に行われるフィラデルフィア国際フラワーショーは、世界最大かつ最も有名なフラワーショーのひとつです。毎年異なるテーマを掲げて開催されるこのフラワーショーでは、ライブのエンターテインメントや料理の実演、ガーデニングのワークショップなどを楽しむことができます。theflowershow.com

4月～9月

Penn's Landing Multicultural Series (ペンズ・ランディング・マルチカルチュラル・シリーズ)

デラウェア川沿いのペンズ・ランディングで夏を通じて開催される「マルチカルチュラル・シリーズ」。多様な文化的背景を持つフィラデルフィア市民が代々受け継いできた伝統に光を当てるイベントです。delawareriverwaterfront.com

Wawa Welcome America! (ワワ・ウェルカム・アメリカ!)

独立記念日(7月4日)の週
アメリカ合衆国建国の地フィラデルフィアで行われる、国内最大の独立記念日イベントです。「ワワ・ウェルカム・アメリカ!」は無料で参加できるイベントで、6月末から開始して、7月4日の大規模なパレードでクライマックスを迎えます。このパレードはフィラデルフィアの史跡をたどり、有名なフィラデルフィア美術館前の階段上でのコンサートと花火で締めくくられます。welcomeamerica.com

9月

FringeArts Festival (フリンジアーツ・フェスティバル)

毎年9月に18日間、フィラデルフィア市内全域で開催されるフリンジアーツ・フェスティバルは、楽しく親しみやすい雰囲気の中で開催される最先端の舞台芸術祭です。フィラデルフィアとその近郊からはもちろん、全米各地や世界各国からも、最先端のアーティストたちが集って参加します。伝統的な劇場から街角のバー、空き店舗まで、市内各所さまざまな場所でショーが行われます。文化的な刺激にあふれた独創的な体験がノンストップでお楽しみいただけます。fringearts.com

10月～5月

Philadelphia Orchestra Season (フィラデルフィア管弦楽団)

1900年に創設されたフィラデルフィア管弦楽団は米国で最も長い歴史を持ち、最も尊敬されているオーケストラです。「フィラデルフィア・サウンド」として知られる独特の音色で聴衆を魅了するフィラデルフィア管弦楽団は、最先端の設備を備えたキンメル舞台芸術センターで年間100回以上の公演を行っています。また、夏にはザ・マン・センター・フォー・ザ・パフォーマンス・アーツで屋外コンサートを行います。誰もが知っているような名曲から童謡まで、レパートリーの幅広さも自慢のオーケストラです。philorch.org

年間通じて

LGBT Events (LGBT イベント)

毎年6月に開催される「フィリー・プライド・LGBTパレード&フェスティバル」や、ゲイやレズビアンをテーマに7月の2週間にわたって開催される国際映画祭「QFEST」などは必見です。フィラデルフィアでは、ゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーをテーマとした全米最大規模のシンポジウムとフェスティバルである「イコリシティ・フォーラム」が毎年春に開催されています。1週間にわたって開催されるこのフォーラムでは、パネルディスカッションやパーティー、アートの展示会などが行われるほか、「インターナショナル・イコリシティ・ディナー」や「サンデー・アウト!」など、さまざまなイベントも展開されます。phillypride.org | qfest.com | equalityforum.com

全イベントのリストは
discoverPHL.com/events で
ご確認ください。

PHILADELPHIA ORIGINALS

街の再活性化のために：肉屋、パン屋からロウソク製造者まで、
フィラデルフィアのものづくりの未来を担う
新世代をご紹介します。



文：ローレン・マッカチョン・写真：キャサリン・カーナウ

フィラデルフィアは製造業の都市として発展してきました。そのスタートは植民地時代にまで遡ります。ペンシルベニア州の南東部、スクールキル川とデラウェア川に挟まれたエリアに移り住んだ人々が数軒の工房を開いたのがすべての始まりでした。やがてそこから工場や長屋街が成長し、高層ビルが建ち、郊外エリアが拡大していきました。20世紀の後半に入ると、全米各都市との航空ネットワークが構築されていきます。フィラデルフィアから製造業が離れていったのもこの時代でした。産業の衰退が人口の減少にも繋がりました。かつては賑わいを見せていた建物からも人の姿が消えて行きました。歴史あるワシントン広場には雑草が生い茂るようになりました。それから数十年の時間が過ぎました。1970年代後半になると、クリエイティブな人々や都市計画者たちがたくさんの空き家を安い物件として目を付け、注目を浴びるようになりました。職人やシェフ、デザイナー、修理業者、醸造家、建築業者など、低価格の物件を探していたさまざまな職業の人々が移り住み、フィラデルフィアの都市復興が始まりました。他の都市では職人たちの居場所がどんどん少なくなってきたこともあり、ものづくりに従事する人々が続々とフィラデルフィアに集い定着し、増えていきました。彼らこそが、企業家精神豊かで活力のある今日のフィラデルフィアを生み出す原動力となったのです。

地元の人々は、黄金に輝くクロワッサンなどのおいしいパンを手に入れるため、朝早くからアルチザン・ブーランジェ・パティシエ（左上）に訪れます。フレ・オイエジデ（右上）は仕立屋ですが、2歳の娘と一緒に過ごすために自宅で仕事をする日もあります。エレン・イン（左下）はオールドシティ地区で長年人気のレストラン「フォーク」を営んでいます。アイスクリームショップ「フランクリン・ファウンテン」のアイスクリーム用コーン（右下）。



ミシェル・リブソン 木に寄り添う家具職人

18世紀、富裕なフィラデルフィア市民の間では、真新しい家具のそばでポーズをとって写真を撮ることが流行していました。家具職人たちはオールドシティやソサエティ・ヒルなどの地区に小さな工房を構え、桜材やクルミ材を使ってアン王朝風の机やチップンデル風の椅子などの高級家具を作っていました。今日、そうしたエリアは家具職人たちが工房を構えるには家賃が高すぎます。そのため、現代の家具職人たちは、市の周縁部のかつては工業現場だったエリアに工房を開いて活動しています。かつては倉庫として使われていた建物を工房として活用しているケースもあります。これなら、安い家賃で広いスペースが確保できるからです。ミシェル・リブソンが現在工房として使っている建物は、かつて棺工場でした。ウィリアム・サヴェリスやトーマス・アフレックスなど、かつてフィラデルフィアで活躍していた家具職人たちと同じように、現代の家具職人たちも時代の美意識を自らの作品に反映させています。リブソンが捉えた時代の感性は、1950年代の家具より着想を得た、すらっとしたスタイルのテーブルやデスク、それにAVラックなどに表現されています。彼女の作品の人気は、洗練された趣味を持つ人々の間で口コミにより広がっています。「私にとっては、ものづくりというのは問題を解決するのに似ています」とリブソンは言います。リブソンは、以前はストローベイルと呼ばれる藁のブロックでの家造りを仕事としていました。その後、

ペンシルベニアの有名な家具職人であるボブ・イングラムやジャック・ラリモアのもとで修業を積みました。最近では、手作業での木材加工だけでなく、コンピューターを使用した新型機械による木材加工にも取り組んでいます。また、木工を趣味とする人々のための教室も開いています。「人々は、ものが作られる工程に関わりたいたいと思っているようです」と彼女は語ります。「器用にものを作ることに對する憧れがあるようです。」

■ MICHELLE LIPSON WOODWORKING, 3211 CEDAR ST.

ナンシー・バートンとビル・バートン ビール造りのパイオニア

ビールこそが、神が私たちを愛し、私たちが幸せになることを望んでいることの証拠だ。」この言葉は、フィラデルフィアの政治家で発明家でもあったベンジャミン・フランクリンの言葉として伝えられています。これは実際にはフランクリンの言葉ではないのですが、フィラデルフィアの地元民がそう信じてやまないのも不思議なことではありません。今から100年前、フィラデルフィアは西半球で最大のビール生産地でした。今日、新世代のビール醸造家たちの活躍により、フィラデルフィアはビールの街としてのかつての輝きを取り戻そうとしています。ナンシー・バートンとビル・バートンもその一翼を担っている醸造家です。二人が経営するフィラデルフィア・ブルーイング・カンパニーの他にも、ヤーズ、ビクトリー、フライング・フィッシュ、ドック・ストリート、セント・ベンジャミンなど、フィ



オルニーでカスタム自転車をつくるスティーブ・ビレンキー（上）。ナンシー・バートン、ビル・バートン、ジム・マクブライドの3人が経営するフィラデルフィア・ブルーイング・カンパニー（中央）は、19世紀に建てられた醸造所の建物を再利用しています。自作のクルミ材の椅子を手にポーズをとるミシェル・リブソン（右）。



フィラデルフィアには数多くの地ビール醸造所があります。その味は市内の多くの飲食店で確かめることができます。毎週土曜日の午後、フィラデルフィア・ブルーイング・カンパニーでは19世紀の工場を改修した醸造所のツアーを行っています。ツアーに参加すると無料でビールの試飲もできます（近郊で収穫されたホップを使用した「ハーベスト・フロム・ザ・フッド」も是非お試しあれ）。「1ペニーの節約は1ペニーの稼ぎと同じ」というのはフランクリンの実の言葉ですが、もしも彼がこのツアーに参加したのであれば、自分の言葉の正しさを再確認したことでしょう。

■ PHILADELPHIA BREWING COMPANY, 2440 FRANKFORD AVE.

スティーブン・ビレンキー カスタムメイドの自転車

人里離れたオルニー地区にあるスティーブン・ビレンキーの自転車店。ここで販売されている自転車のほとんどは、「第一次世界大戦の頃の技術」でつくられている、とビレンキーは言います。フィラデルフィアの北東部に生まれたビレンキーが自転車づくりを始めたのは1983年のことで、当時は顧客からの依頼がまだ紙の郵便で届いていた時代で、個人で自転車を製造する職人はアメリカではまだまだ物珍しく、ビレンキーによると「二人乗り自転車はほとんどがヨーロッパ製」でした。現在、ビレンキーは6人のスタッフを抱え、数多くの同業者の中でも熟練者として一目置かれる存在となっています。ビレンキーが得意としているのは、他にはない

ユニークなフレームのデザインです。リカンベントやシクロクロス、レトロフィット、手こぎ式、ロングテール（荷物を引いて走るために後部が長くなっているもの）など、身体に障害を抱える人々や特別なライフスタイルを送る人々のための自転車を生み出しています。親子揃ってのトライアスロン選手として知られるディック・ホイットとリック・ホイットが競技で使用する自転車は、ビレンキーが手がけたものです。シアトル交響楽団のバイオリニストの依頼で、バイオリンを持ち運べるような自転車も製作しました。ノルウェーの2人の郵便配達人から注文を受けたこともあります。自転車乗りにとって、ビレンキーは伝説的な存在なのです。しかし、そんなビレンキーも地元フィラデルフィアではその名はほとんど知られていません。フィラデルフィアの市内では自転車専用レーンはまだあまり普及しておらず、バイクシェアの制度もまだ実現していません（計画では2015年に開始予定）。価格の高さも、知名度の低さの一因かもしれません。ビレンキーの自転車は、一番安いものでも3,000ドル、高いものでは15,000ドルを超えます。「我々の手法では、大量生産はできないのだ。」とビレンキーは語ります。そうは言いながらも、ビレンキーは、シュウィンやミヤタなどの古い自転車の改装の仕事も喜んで引き受けています。彼の哲学はシンプルです。「自転車は堅実で実用的な乗り物でなければならない。50年は乗り続けられるくらいじゃないといけない。」

■ BILENKY CYCLE WORKS, 5319 NORTH SECOND ST.





シェーン・コンフェクショナリーのロフトでチョコレート
の中に入れるパンプキンバタークリームをかき混ぜて
いるライアンとエリックのバーリー兄弟。

エリック・バーリーとライアン・バーリー スイーツは歴史の味わい

ガラス製のアンティークの瓶に入って、古びた建物の「シェーン・コンフェクショナリー」の店頭に並ぶチョコレートは、一見すると包装紙を取り外したハーシーズのチョコレートのようにも見えます。しかし、その味は全く異なります。それは、かつてはここから通りを数ブロック北に上がったオールドシティにあった菓子工場で作られていた、有名な「ウィルバー・バッツ」です。ウィルバー・バッツは製菓業がフィラデルフィアの一大産業だった時代の象徴でしたが、製菓業界に大量生産技術が導入されるにつれて、フィラデルフィアの菓子工場もそのほとんどが姿を消していきました。でも、すべてが消えてしまったわけではありません。シェーン・コンフェクショナリーは米国で最も長く続いている銘菓店ですが、7番通りのロアーズやケンジントンのプレイシャスなど、シェーンの他にもいくつかの会社が今でも営業を続けています。2010年、ライアンとエリックのバーリー兄弟がシェーンを買収したところから新たな成功物語が幕を開けます。バーリー兄弟は、ビクトリア朝の雰囲気が特徴的な、クラシックなアイスクリームショップ「フランクリン・ファウンテン」の創業者としても知られています。シェーンとフランクリン・ファウンテンは隣接していました。「店舗は改装が必要な状態でした」とエリックは振り返ります。建物の改築には18カ月かかりました。天井にはブリキの板を張り、床はバイン材で仕上げました。二人は店舗を新しくしようとしたわけではありません。「昔ながらのお菓子屋さんの姿」を取り戻したかった、とエリックは語ります。二人は、1920年につくられた重さ2トンの専用の機械を使って、階上のロフトでクラシックなフィリー・バタークリームを製造しています。イースター用のチョコレートに使う型



アンナ・バリオとペイジ・ニールと、その自作のジュエリー。

は1,000種類以上もあります。もちろん時代に合わせたアレンジも忘れてはいません。香り付けたマシュマロやハニーラベンダーキャラメルなどは二人が生み出した新製品です。チョコレートドリンクが楽しめるカフェも新しくオープンしました。さらに、もうひとつ譲歩してオンラインショップも開設しました。ブランドー漬けのチェリーやノンパレルチョコレートなどが自宅にいながらにして楽しめるようになりました。

■ SHANE CONFECTIONERY, 110 MARKET ST.

アンナ・バリオとペイジ・ニール グローバルな金属細工人

サンソム通りのうち、7番通りと8番通りの間の数ブロック、大文字のアルファベット「J」の形をしたエリアは「ジュエラーズ通り」として知られています。ここはもともと米国初のダイヤモンド取引地区でした。宝飾デザイナーのコンビ、アンナ・バリオとペイジ・ニールは、ここから数ブロック南に行ったところに店舗を構え、彼ら独自の「米国初」の取り組みを行っています。二人は「地球に優しく倫理的なジュエリーづくり」という方針を2007年に打ち出しました。彼らがつくるジュエリーに使われている貴金属や宝石類はすべて、責任ある方法で採掘されたものか、リサイクルされたものです。「ものづくりに関わる者として、社会に対してポジティブな影響を与えたいと思ったのです」とバリオは語ります。2014年には、二人は南アフリカの小さな協同組合と契約しているアライアンス・フォー・レスポンシブル・マイニング（責任ある採掘のための同盟）を通して金の板を仕入れるようになりました。「鉱山労働者の労働環境や健康状態、周辺の環境なども把握することができています」とバリオは続けます。鉱山労働者に対して支払われる手数料の一部は、現地の地域コミュニティの構築のために役立てられています。宝石、特にダイヤモンドに関しても、バリオとニールの二人は同じような取り組みを行っています。「婚約指輪や結婚指輪などで原材料の調達先を気にするようになる人が多いですね」とバリオは説明します。「なんといっても、一生身につけることになるものですから。」

■ BARIO NEAL, 700 SOUTH SIXTH ST.

エレン・イン ユニークなレストラン

エレン・インはペンシルベニア大学ワートン校で医療経営学を学びました。彼女の学生時代、社会的に流行っていたのが「継続的改善」という言葉でした。病院経営に17年間携わった後、インはレストランのオーナーになりました。そして、「継続的改善」というコンセプトを自ら体現し続けています。彼女が最初にオープンしたレストランは、オールドシティのアメリカン・ビストロ「フォーク」です。ここは、フィラデルフィアで（そして全米でも）最高クラスのレストランとしての評価を受け続けています。フォークのオープン当時、この界隈はギャラリー街として知られていました。インは近隣に住むアーティストたちをスタッフとして雇い入れました。そのうちの一人は現在でも給仕人としてこの店で働いています。店の内装づくりにもアーティストたちの才能が活かされ、親しみやすくエレガントな雰囲気が生まれました。ベルベットのドレープ、店内に飾られた抽象画、手描きのランプシェード、入口では看板サインがわりのモザイク画が客を出迎えます。イーライ・カルブがシェフとして仕切るキッチンでも、地元の才能が存分に活用されています。食材はすべて、近隣の農家や肉屋、チーズ職人などから直接仕入れているのです。『「ファーム・トゥ・テーブル（農場から食卓まで）」という言葉が生み出される前から、ここではその考え方を実践していたのです」とインは言います。昨年、インはフォークの隣に新しいレストランをオープンしました。「ハイ・ストリート・オン・マーケット」はパンを中心に据えたカジュアルなレストランで、朝食からディナーまで提供しています。さらにその数カ月後、インとシェフのカルブはリッテンハウス広場にある先進的にモダンな雰囲気のレストラン「a.kitchen」と「a.bar」の経営権を買取りました。この2つの店舗では、契約農家から仕入れた食材を使用し、地元フィラデルフィアで作られた陶器や木製のテーブルウェアを使っています。「改善を続けるか、さもなくば辞めるか、二つに一つなのです」とインは言います。

■ FORK RESTAURANT, 306 MARKET ST.; HIGH STREET ON MARKET, 308 MARKET ST.; A.KITCHEN + A.BAR, 135 S. 18TH ST.

クリストファー・キアース

料理界の芸術家

フィラデルフィアの食文化を代表するのは高級料理のレストランではありません。ホーギー、ソフトプレッツェル、スクラップル、ティスティケーキ、そしてもちろんチーズステーキなど、労働者階級の人々の要望に応えるために生まれた安くて手軽なファストフードです。そして、その伝統は今も息づいています。しかし、現在ではもっと洗練されたメニューを求める声も強くなっています。そうした要望に応えているのが、有名シェフによる大規模なレストラングループと、個人経営の小規模なレストラン。前者では、例えばテレビで有名なアイアン・シェフの一人、ホセ・ガルセス。彼はフィラデルフィアで10軒近くのレストランを経営しています。一方、パスアUNK・アベニューに2年前にオープンした30席の「ウィル」は後者に当てはまります。ここはフランス風のBYOB（お酒持込み可）スタイルのビストロで、オーナーシェフはクリストファー・キアース。地元でとれた季節の食材を使った、美しい盛りつけのフランス料理で人気を集めています（鴨料理はどれも絶品、テーブルで出されるスープも素晴らしいおいしさです）。地元ではシェフ本人も有名人です。キアースは16歳のときに飲酒運転による交通事故に巻き込まれ、健康な体を取り戻すのに何年もかかりました。しかし、キアースはたゆまぬ努力を続け、地元フィラデルフィアのウォルナツ・ヒル・カレッジのレストラン・スクールを首席で卒業。卒業後はカリフォルニア州のフレンチ・ランドリーやシカゴのトゥルーなどで腕を磨きました。ウィルで、キアースはシェフとしてキッチンで腕を振っているだけではありません。オーナーとして、客へのおもてなしにも心を配っているのです。忙しい土曜日の夜にどうしても2人分の席を予約したいと言えば、「なんとかしましょう」と彼は必ずこう答えてくれるはずです。

■ WILL, 1911 EAST PASSYUNK AVE.

フレ・オイエジデとサミュエル・ハブラー

世界をつなぐ仕立屋

子供たちに謝らなければならないことがあります。歴史の教科書には、星条旗を初めてつくったのは独立戦争当時のフィラデルフィアの仕立屋、ベッツィ・ロスだったと書いてありますが、歴史学者たちの間ではこの説に対して疑義が唱えられています。でも、アフリカからの影響を色濃く反映するメンズウェアのブランド「イキレ・ジョーンズ」を支えているのが誰なのかについては、疑いの余地はありません。フレ・オイエジデとサミュエル・ハブラーの仕事場での作業着はワックスコットンですが、二人が最初に発表したオーダーメイドのツイードのスーツのコレクションでは、「イキレ」ならではの西アフリカ風のプリント生地が裏地に使われていました。オイエジデはアフロビートのミュージシャンでもあり、かつては民事訴訟を専門とする弁護士でもありました。ハブラーは家業が仕立屋で、デザインも手がけています。二人は、ヨーロッパの伝統的な5段階のソフトソーイングプロセスで服を仕立てています。オイエジデはナイジェリア生まれで、フィラデルフィアで育ちました。「この生地のDNAはとても国際的なのです」と彼は言います。「オランダ製ですが、西アフリカの市場向けにつくられたものです。このパターンは、スコットランドのタータンチェックと同じように、西アフリカの人々にとっては象徴的な意味合いがあるのです。」オイエジデは大きな法律事務所を辞めてイキレ・ジョーンズを立ち上げました。「自分が大切だと思う価値観を中心に据えた人生を送りたいと思ったのです」とオイエジデは言います。彼が大切にしている価値観とは例えば、物語を語り伝えること。そして、一人娘のナイマのそばで仕事をする事。「今いる場所とは違う世界のことを、興味を持ってもらえるようなかたちで人々に伝えたいと思っています」とオイエジデは語ります。

■ IKIRÉ JONES, IKIREJONES.COM.

ベン・ヴォルタ

壁画の伝道師

非営利団体「ミューラル・アーツ・プログラム」によって制作された市内3,600カ所のパブリックアートをすべて見て回るのは至難





大胆な柄のジャケットを仕立てるサミュエル・ハブラーとワレ・オイエジデ（上）。レストラン「ウィル」でフルーツと花のサラダにココナッツピネグレットソースをかけるシェフのクリストファー・キアース（左）。自分たちが制作した壁画の前に立つベン・ヴォルタと中学生たち（下）。



の業です。でも、ちょっと回り道になったとしても、見に行く価値は十分にあります。市内全域に展開している全米最大規模の壁画コレクションは、今から30年前に落書き（グラフィティ）撲滅の取り組みとして始まりました。センターシティにも10数点の作品があります。そのほとんどが、かつては落書きばかりしていたグラフィティアーティストや、非行少年、それにグレーターフォード刑務所の囚人などの手によって描かれたものです。彼らはミューラル・アーツ・プログラムのスタッフたちから絵画や建築、造園に関するトレーニングを受けて、これらの作品を制作したのです。コミュニティアートの力を最もよく示している壁画作品は、フィラデルフィアの郊外にあります。例えばマントウア地区に足を延ばしてみましょう。ここは大学街のすぐ北側に位置し、オバマ政権の下で制定された5つの「プロミスゾーン」のうちのひとつとなっています。ここに建てられている幼稚園から中学校までの一貫教育校、モートン・マクマイケル・スクールにあるのが、面積12,000平方フィート（約1,100平方メートル）の巨大でカラフルな宇宙の図「マイクロ・トゥ・マクロ」です。この学校に通う中学生や、理科の教師や数学の教師との協力のもと、アーティストのベン・ヴォルタが作品のプランを練り上げました。完成までには13カ月もの期間を要しました。実際の壁画制作作業は、ほとんどすべて中学生たちが行いました。そうして生み出された作品は、ヴォルタの言葉を借りれば、「原子から銀河まで、世界のすべてを表現」したものとなっています。この作品の前に立てば、鳥肌が立つほどの強い印象を受けることでしょう。フィラデルフィアならではの、心に深く刻み込まれるアート体験がここにはあります。

■ ミューラル・アーツ・ツアーはセンターシティの各所からスタートします。

ダン・フィオレラとトリシャ・フィオレラ ソーセージづくりの匠

ルイジ・フィオレラがソーセージ店「フィオレラ・ブラザーズ・ソーセージ・カンパニー」を開いたのは1892年のことでした。店内の様子は、開店当時のままで変わっていません。当時からずっと使われ続けている秤の上に飾られた写真の中から、ルイジ・フィオレラは今でも自分の店を見守り続けています。真鍮製のレジも開店当時のもの。昔ながらの麻紐を使った荷物用エレベーターも、大理石とモザイクのカウンターも、ルイジが店を切り盛りしていた時代から変わっていません。ルイジは19歳で南イタリアのフォッジアからアメリカに渡ってきました。センターシティの南の端のエリアに定着したイタリア移民第一陣の中の一入でした。労働者階級の地区として知られるこのエリアに最初に住み始めたのは、イタリア移民だけではなくありませんでした。スウェーデンからの移民もここに居を構えたのです。しかし、たくさんの長屋や教会を建て、街を発展させていったのはイタリア人たちでした。全米最古の屋外マーケットとして知られる9番通りの屋外マーケットをつくったのもイタリア移民でした。そしてそれらの遺産はすべて、今でも現役で使われ続けています。ルイジの孫にあたるダン・フィオレラは現在65歳。44年間にわたってこのソーセージ店で働き続けてきました。最初は父のもとで、そして後には兄弟とともに、そして現在では妻のトリシャと一緒に店の経営にあたっています。店を引き継いだダンも、新しい冷蔵庫やキッチンなど、いくつかの新しい設備を導入しました。しかし、製品に関しては、ダンは祖父ルイジの精神を忠実に引き継いでいます。「ここでつくっているソーセージはすべてイタリアの伝統的なレシピに基づいています。全部で7種類あります。辛いソーセージ、辛くないソーセージ、ウイキョウ入りのソーセージ、ウイキョウ抜きのソーセージ。チーズソーセージや朝食用のソーセージもつくっています。レバーソーセージのレシピは私の曾祖母が考案したものです。」世の中には、これ以上改善する余地のないものも確かに存在するようです。

■ FIORELLA'S SAUSAGE, 817 CHRISTIAN ST.

アマンダ・イーブとアンドレ・チン 早起きは三文の徳

眠らない街という呼び名はよく耳にします。でも、フィラデルフィアはこれには当てはまりません。バーやクラブは午前2時には閉まってしまいます。週末の朝、地元の人々はたいいゆっくり寝ています。

でも、アルチザン・ブーランジェ・パティシエのパンを食べたかったら、朝寝坊は許されません。サウス・フィラデルフィアの静かな一角に、地元のパン好きが朝早くからアンドレ・チンとアマンダ・イーブの店で、本場フランスにも負けないバゲットやバターの香り漂うおいしい菓子パンを手に入れるために近所の人が集まってきます。パンを焼くのはパリで修業したパティシエのチン。イーブはカウンター担当で、ペストリーにフィリングを入れたり、特製のケーキをつくったり、クロワッサンを使った朝食用のサンドイッチやバインミーと呼ばれるベトナム風のホーギーを用意したりするのが仕事です。二人ともカンボジアの生まれですが、出会ったのはウエスト・フィラデルフィアのイーブの父が営むドーナツ店でした。二人ともカンボジアから逃れるため、チンは単身フランスに渡り、イーブが家族とともにペンシルベニアへ引っ越してきて、それぞれ数年の時間が経ったあとでした。二人はやがて結婚し、子供も生まれ、サウス・フィラデルフィアに移り住みます。そして、この場所に空き物件を見つけたのです。最初の数年間は「大変でした」とチンは話します。それでもなんとか店を続けていた二人に、やがて幸運が訪れます。近くのイタリア人地区に新たに移民住む人々が増え始め、エリア一帯が「イースト・パスアंक」の呼び名で知られるようになっていきました。新たな住民たちが家族を持つようになると、二人のビジネスも軌道に乗りはじめます。チンは、店の前に行列ができる様子を「とてもありがたいこと」と言います。でも、地元の人々にとってみれば、それは「必要なこと」なのです。

■ ARTISAN BOULANGER PATISSIER, 1218 MIFFLIN ST.

レレ・トラン デザイナーの協同組合

かつては、ファッションにこだわるフィラデルフィアっ子が服を買いに行くのはニューヨークと相場が決まっていた。でも今は違

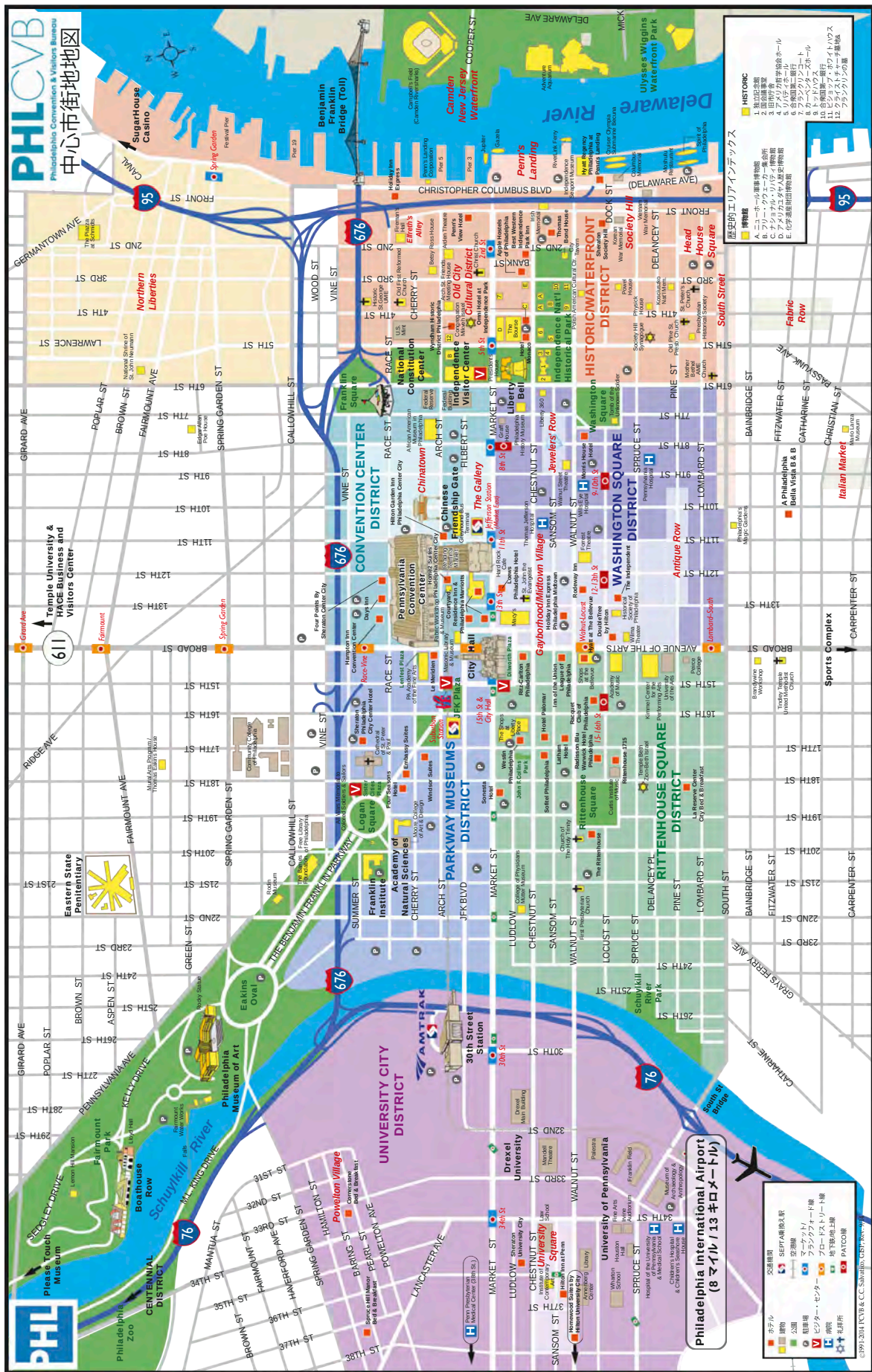
います。フィラデルフィアにも質の高いファッションショップが増えてきたのは10年とちょっと前のこと。景気が良くなったことがファッション小売業の復活理由だと分析する人もいます。フィラデルフィア南部に本社を構えるアーバン・アウトフィッターズの成長のおかげだという見方や地元の大学での服飾デザインのプロプログラムの充実化を理由に挙げる人もいます。でも、先進的なデザイナーが経営する小規模なブティックのおかげだったかもしれません。レレ・トランもそうしたデザイナーの一人です。トランはオールドシティに自分の名前をつけたショップ（現在は閉店）を1997年オープンしました。その頃はちょうど、歴史的なこのエリアに住む人々がフィラデルフィアならではのファッションスタイルを求めている時期でした。間もなく、ヴィンテージショップや個人経営のブティック、さらには世界的なブランドなどがトラン氏のあとを追うかのようにこのエリアに進出してきます。現在、トラン氏はフィラデルフィアのムーア・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザインの教授です。同時に、デザイナー商品の製造販売をさらに一歩先へと押し進める取り組みも行っています。それは3年前に彼女が編成した地元のデザイナーによる協同組合のショップ「US*U.S.」です。アーチ通りの集会所のちょうど真向いに位置するこの小さなショップでは、スパンコールをあしらったブロックコートから、ファスナー付きでさまざまに形をアレンジできるウールスカーフまで、まさに粋なアイテムが揃っています。

■ US*U.S., 323 ARCH ST.

ローレン・マッカチオンはフィラデルフィア・デイルー・ニュースの文化・食・家族担当の記者です。寄稿写真家のキャサリン・カーナウは、この記事のためにフィラデルフィアを撮影しているうちに、この街のことがすっかり気に入ってしまいました。



オールドシティにある共同ブティックに集まったレレ・トラン（中央）と協同組合「US*U.S.」のデザイナーたち。





bkiphoto.com/PHLCVB

MAKE IT PHL (PHLに決定)



米国北東回廊

フィラデルフィア：

気軽に訪れて楽しめる、見どころ満載の街

フィラデルフィアはまさに中心的な役割を果たしている都市です。米国北東部に位置し、高速鉄道を利用すればニューヨーク市からは1時間強、そしてワシントンDCからも2時間未満です。フィラデルフィア国際空港 (PHL) の発着回数は一日1,000便を超えているので、空路でのアクセスも便利でお手頃です。

出張、会議、あるいは観光で訪れた世界中の方々はこの国際都市で、本場のアメリカ史、奮い立つような美術や文化、免税品の買い物、活力に満ちた職人現場、魅力的なお食事やナイトライフ、そして緑豊かな空間を全て見つけることができます。

詳細は discoverPHL.com/natgeo をご覧ください。